

汲古一心

講演より一 『書はどういう芸術か』(二) 中村素堂

私は大変粗雑なものの考え方ですから、あるいはそのところに違いがあるかも知れませんが、芸術という名称の中に、可視的な美を造形するものは、美術と名づけていれてしまってもいいのではないか。たとえば言葉の意味をつくるもの、詩とか歌、俳句といったもの。それから形の美を追求してゆくもの、彫刻・絵画・建築等、また音の構成によって、美しいものをもし出そうとする音楽。人間の行動を描いてゆく美では、舞踊・演劇・映画がある。そういうものを全部包括して芸術であるとし、その中に美術とか音楽とかいって、ひとつの分類をしていいのではないかと、体系を立てているわけです。これは、ものを話してゆくうちに、理論的な展開をしてゆかないと人が納得しませんから、勝手な整理をつけたわけですが、それぞれ根拠がないわけではない。どういう根拠かと細かく説明していると、また長くなりますので、前にお話ししたことを別な角度から見えますと、音楽とか、舞踊とか、演劇などは、時間の推移の中で消えていってしまう芸術、すなわち過去になつてしまうものです。ところが文章とか詩、歌とかいう、言葉を芸術にしたものは消えないんです。しかし、音楽と同じような性質を持っている。これは形のないという点で共通です。つまり可視的ではない。記録しておくことはできるが形は捕えられない。それから演劇などは総合芸術です。森鷗外の『雁』という有名な文学を演劇にする。演劇の効果を出すために、音楽が入り、台詞もある。台本は立派な芸術である。それらを総合して演劇というひとつの芸術が構成される。また有形の芸術がある。つまり可視的なものです。建築・陶芸・絵画・彫刻そして書道がそれである。その中で、書道は多くの特性を持った美術です。お前は書家だからそういうことをいうのだと思われぬかも知れないが、たとえば日展などを見ていると、あれだけいろいろなもの展示されていますが、書というものがいかに特

異なものであるかということ、書家自身認識していないのではないかと思う。建築・絵画・彫刻など、おのおのこういうものだという、はっきりした概念がありますが、書にもやはり独自の概念がある。

一体美術といわれるものが、音楽・演劇・文学などと違うのはその推移を表現することが出来ないということ、音楽などは初めは悲しい曲だったのが、次第に楽しい曲に変わってゆくとか、ある人の運命の移り変わってゆく姿を、音楽は音で、演劇・文学もそれぞれで面で描写してゆくことができる。ところが美術はそれができない。人といふ争ってそれが次第に和解に到達するといったことは、美術では表現できない。ある瞬間の悲しみの表現、喜びの表現はできますが。美術にはそういう制約がある。

そこでもう一度芸術に戻って、一体芸術の目的は何かということを考えてみますと、まず人間はものを見ても、その受け取り方がそれぞれ違う。感情の動きが違うのです。つまり心の活動がちがう。その心の活動を煮つめてそれを人に訴える。何か人間に向かつて美しいものを訴えてゆこうとする行動、それが芸術です。つまり何らかの形で、音楽・劇・文学・絵画・彫刻と形をつくる。音を作るということで、自分に映ってきたある感情を煮つめて表現する、そして人に訴えてゆきたいという運動です。これは人間が生まれながらにして持っているものです。子供でも前に歩けるようになると、僕は歩けるよといったところを見てもらいたい。発表意欲というもの、は生まれながらに備わっているんです。それが洗練されて、何らかのものに再現して人に訴える。喜びでも悲しみでも共鳴を求め、それが芸術行為です。その芸術行為の中で、うっかりすると、これも芸術かと入れてしまいそうになりますが、自然現象などは芸術ではない。だから太陽が沈んでゆくのは、いくらきれいでも芸術じゃない。花が咲いたすばらしい芸術だということはない。そうではなく人間が花が咲いたのを見て受け取った感情、太陽が沈んでゆくのを、受け取った感情を人間を通じておきかえて表れたもの、それが芸術だ。(つづく)

『筆間雜記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。

〔祭墨〕、昭和五十五年